



# 俯瞰 ふかん

## 言論の自由時代の「図書館の自由」とそれを支えるもの

山口真也

SNSを使って誰もが自由に発言できるようになった反面、なぜか言論の自由度は日々低下しているように感じられる。例えば、著名人が政治的な問題にコメントするとすぐに「偏っている」と「炎上」してしまう。しかし、政治的な発言の全てが批判されているわけではない。政府への批判的な発言は猛烈に攻撃されるのに、政府を支持する言論は炎上するほどまでには責められない。最近も、首相と会食に行ったタレントたちのブログ写真が微笑ましくニュースサイトで報じられる一方で、「体制側の立場を演じることに抵抗感がある」と語った俳優がネット上で叩かれている様子がさも深刻そうに報じられるということがあった。著名人への攻撃が、それを見せられている無名の人々からも自由を奪い始めていることは容易に想像できるだろう。

こうした不自由さは、図書館の活動にも影響を与えるようになってきている。ある公共図書館で日中国交正常化を記念した資料展へ「中国となって仲良くしなくていい」と複数の利用者から執拗なクレームがあったという話を聞いたことがある。SEALDsという学生団体の本の図書館の新刊案内に載せたところ、「校長から偏つた案内と指摘があった」という相談を受けたこともある。こうした問題が起こった時、図書館はどう対応すればいいのか。

図書館界には「図書館の自由に関する

宣言」（日本図書館協会）というガイドラインがあり、「多様な、対立する意見のある問題については、それぞれの観点に立つ資料を幅広く収集する」という指針が示されている。例えば、憲法改正を問う資料であれば、反対する資料だけでなく、賛成する資料も集めなければならぬ。現実の言論はグラデーションだから、中間的意見や少数意見に目配りすることも求められる。これらは外部や内部からの批判を回避する一つの手段であり、知る自由の保障を任務とする図書館界が積み上げてきた知恵ともいえるだろう。

さて、ここまですべてが一般的な図書館の自由の説明なのだが、冒頭で紹介したような言論の自由度の低下を思うとき、沖繩で生活をする筆者は、そのあり方を見つめ直す必要があるのではないかと考えることがある。基地移設問題をみても分かるように、国家が押し進めようとする政策は圧倒的な力でいろいろなものをなぎ倒していく。ネット上には政府を批判した言論だけが徹底的に叩かれる雰囲気もある。ここで一つの疑問として浮かび上がるのが、各々の言論に「我関せず」と距離をとり、それぞれに等しい価値を認めることが「図書館の自由」なのか、ということである。図書館は、放っておいても押し付けられてくる言論を支持する資料よりも、その問題点を指摘したり、利用者の視野を広げたりするような資料をより価値のあるものとして扱うべきで



やまぐちしんや  
沖繩国際大学総合文化学部教授  
主な著作…

- ・「図書館ノート——沖繩から「図書館の自由」を考える」教育史料出版会、2016年。
- ・「社会と図書館 まちづくり・社会的包摂」『図書館界』70巻1号、2018年。

はないか。図書館が「権力からの自由」という価値をもつことこそが図書館の自由の本来の意味なのではないか。

本号の特集でも取り上げられているが、現在、約7割の公立公共図書館の職員が「非正規」という不安定な身分で働いている。多くが正規職員のように身分が守られていない中、首長や議員が「この資料は集めるべきではない」と圧力をかけてきた場合などに、図書館の自由の理念を貫くことは可能なのだろうか。権力からの自由までも求めるのならばなおさらそれは難しいように思う。

図書館の自由は、身分が守られてこそ初めて実現できる。言論の自由な時代だからこそ、本質的課題として雇用の問題にも取り組んでいかなければならない。